

## 審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文では教職課程の履修生に期待される資質・能力の育成を図るために、4通りのロール・プレイングの方法（教師を主役とした混合型ロール・プレイング、教師を主役とした心理劇的ロール・プレイング、生涯発達の心理劇的ロール・プレイング、マジックスクールの心理劇的ロール・プレイング）を考案し、それぞれのロール・プレイングの効果・成果に関する検討を行っている。1980年代以降、初等中等教育の場を取り巻く問題の深刻化を背景に、文部科学省は教職課程の履修生の資質・能力の向上を目的として、教職課程教育へのロール・プレイングの導入を推進している。教職課程の履修生に期待される資質・能力には、①社会性・コミュニケーション能力、②教師役割の理解、③児童・生徒理解や生徒指導・学級経営の視点の形成、④教職に関する学びの意欲等があげられる。しかし、大学の教職課程の授業におけるロール・プレイングを対象とした研究はさほど多くはなく、特に上述の資質・能力の育成を目指したロール・プレイングに関する実証的な研究はほとんどみられない。教職課程の履修生の質の向上はわが国の教育の質に大きな影響を与えるため、この分野の研究は積極的に推進されるべきものと考えられる。したがって、本論文の目的には意義と独創性が認められる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文で用いた研究方法は2通りである。その第1の方法は、大学の教職課程の授業で、履修生を対象としてロール・プレイングを実施して、評定尺度法を用いた質問紙調査を行う方法である。この方法では、ロール・プレイングの経過を報告するとともに、統計的な分析を行っている。第2の方法は、大学の教職課程の授業で、履修生を対象としてロール・プレイングを実施し、その経過を報告するとともに、ロール・プレイングに関する感想文の内容に関する質的分析を行う方法である。いずれの方法も心理学の領域においては適切な研究方法である。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

研究1から研究8までの一連の研究では、評定尺度法を用いた質問紙調査の実施前には、質問紙に記載された同意説明文書に基づいて研究目的や調査方法、および倫理的配慮について説明している。また、ロール・プレイングに関する感想文の内容に関する質的分析を行う場合には、すべてのロール・プレイングの終了時に、研究目的や研究方法、および倫理的配慮について説明している。授業に導入したロール・プレイングの研究であることに配慮して、調査協力と授業の成績評価には一切関係がないことや、調査協力は任意のものであり協力しないことによる不利益はないことについても説明したうえで、同意する履修生に調査協力を依頼しており、調査は適切に行われたと考えられる。

また、評定尺度法を用いた質問紙調査によって得られた回答については、目的に応じて適切な解析（因子分析、対応のある平均値の差の検定、反復測定一元配置分散分析、二要因混合計画分散分析、重回帰分析）が行われている。ロール・プレイングに関する感想文の内容に関する質的分析を行う際には、KJ法が用いられており、感想文の内容の分析方法として適切と判断される。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか。

本論文は、序章、第I部・理論編、第II部・実証研究編、終章によって構成されており、序章、

第Ⅰ部・理論編では豊富な文献・資料の収集が行われている。第Ⅱ部・実証研究編では、序章、第Ⅰ部・理論編で得られた知見に基づいて、研究1から研究8までの幅広い研究が行われている。各研究では考察は調査結果に基づいて行われており、妥当なものと考えられる。また、4通りのロール・プレイングに関する実践と調査は複数回行われており、様々な工夫が行われた結果として、後半の研究になるほど、より有効なロール・プレイングの方法が確立されている。

さらに最終的には、4通りのロール・プレイングに関する複数回の調査・分析から得られた知見を集約して、教職課程の授業に導入可能なロール・プレイングに関する2通りの体系化が行われている。まず、研究1から研究8までの効果・成果を整理して、4通りのロール・プレイングを通して育成可能な資質・能力、効果的な実施手順、および実施上の留意事項について対応させて図式化している。次に、教職課程の科目のなかでも教職に関する科目がロール・プレイングの活用可能性が最も大きいと考えて、教育職員免許法施行規則等を参照して科目の趣旨をまとめ、各科目の名称、各科目の趣旨に即して導入可能なロール・プレイングを対応させて図式化している。

これら二つの体系図は、大学の教職課程の授業に導入可能なロール・プレイングを包括的に捉えるうえで意義深い。また、大学の教職課程にかかわる教員が、自らの担当科目にロール・プレイングを導入する際の指標としても活用できると思われる。したがって、研究の考察と結論は学術的な水準に達していると考えられる。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか。

本論文は従来ほとんど検討されてこなかった大学の教職課程の授業におけるロール・プレイングの方法について幅広く検討し、体系化を行ったものであり、その成果は心理学の領域の研究としても、学校教育の領域における研究としてもユニークで意義のあるものと考えられる。研究内容は実践的なものであり、ロール・プレイングに関するノウハウが蓄積されていない大学の教職課程教育において、すぐに役に立つと思われる。完全ではないにしても、大学の教職課程の授業に導入可能なロール・プレイングの方法が体系化されたことは、大学の教職課程が学校教育におけるロール・プレイングの開発・研究・教育の拠点として機能するために大きな貢献をすると考えられる。したがって、取得学位にふさわしい意義や成果が認められる。

以上のことより、審査委員会では全員一致で、本論文が博士（教育学）の学位にふさわしい論文であると判断した。